



Data

監督・脚本: エリック・バルビエ
 原作: ロマン・ガリ『夜明けの約束』
 (共和国刊)

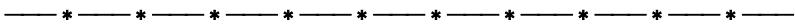
出演: ピエール・ニネ/シャルロット・ゲンズブール/ディディエ・ブルドン/ジャン＝ピエール・ダルッサン/キャサリン・マコーマック/フィネガン・オールドフィールド/パウエル・ピュシヤルスキー/ネモ・シフマン

👁️👁️ みどころ

“フランスの三島由紀夫”とも称され、ゴンクール賞を2度も受賞した天才作家ロマン・ガリの名前も、原作となった自伝『夜明けの約束』も知らなかったのは恥ずかしい限りだが、本作でしっかり勉強できれば問題なし！

本作導入部では、『アンチクライスト』(09年)であっと驚くオールヌードの演技を披露し、カンヌ国際映画祭女優賞を受賞したシャルロット・ゲンズブールが繰り広げる一人息子への教育に唖然！こんなモンスターマザーの下で高校を卒業し、大学でも軍隊でもその影響から離れられなければ、普通はロクな男に育たないはずだが・・・。ここまでやるか！こんな奇跡が本当に起きるか！あっと驚くそんな展開の連続に飽きることはないから、『夜明けの約束』が「現代のクラシック」として今も長く読み継がれていることにも納得。

しかして、新藤兼人監督の『一枚のハガキ』(11年)も意味シンだったが、『母との約束、250通の手紙』という邦題の意味は？“意外な掘り出しモノ”とも言える快作に、私は大満足！



■□■フランスにはこんな天才作家も！映画は勉強！■□■

フランスの近現代の有名な作家といえば『存在と無』を書いたサルトルや『第二の性』を書いたシモーヌ・ド・ボーヴォワールだが、そのフランスには『あなたはまだ帰ってこない』(『シネマ 43』220頁)で描かれた女流作家マルグリット・デュラスがいることをはじめて知った、また女流作家コレットがいることを、『コレット』(『シネマ 45』177頁)ではじめて知った。しかし、寡聞にして私は、フランスのゴンクール賞を史上ただ一人2

度も受賞した天才作家ロマン・ガリ（1914年～1980年）の名前もその作品も全く知らなかった。プレスシートでは、彼のことを次の通り紹介しているので、それを転記すると次の通りだ、

出生名、ロマン・カツェフ。1914年、ロシア帝国領ヴィリア（現在のリトアニア共和国ヴィリニウス）にて生まれる。ユダヤ系ロシア移民で、ポーランドで幼少期を過ごし、35年にフランス国籍を取得。第二次世界大戦では空軍で対独戦に従事。第二次世界大戦後、フランス外務省に勤務し、ブルガリア、スイス、アメリカ各国の大使館参事官や、ロサンゼルス駐在領事を務めた。権威あるフランス文学最高峰ゴンクール賞を史上唯一2度受賞（2度目はペンネームのエミール・アジャール）。外交官、映画監督、そしてプライベートでは『勝手にしやがれ』の女優ジーン・セバーグの夫と複数の顔を持ち、最後は拳銃自殺を遂げたことでも知られる。遺書には「ジーン・セバーグとは何の関係もない」、「いっぱい楽しんだ。さようなら、ありがとう」と記されていた。

この経歴は驚くべきものだが、そのプレスシートには、「フランスの三島由紀夫とも称される」、と書かれているが、それは一体なぜ？それは、三島由紀夫と同じように自殺したためばかりではないと思うのだが、ふたりの共通点は一体どこに？蜷川実花監督の『人間失格 太宰治と3人の女たち』（19年）では、誰もがよく知っている太宰治の作家としての力量と3人の女たちとの交際のあり方を、そして何よりも彼が自殺に至った本当の事情（？）をしっかりと勉強できたが（『シネマ45』131頁）、本作では私が全く知らなかったフランスの作家ロマン・ガリを知ることができた。まさに映画は勉強だ、もともと『母との約束、250通の手紙』というタイトルでは、本作がどんな映画かさっぱりわからないが・・・

■□冒頭の1950年代半ばから、物語は一気に1924年に■□

私が映画検定3級に合格した2016年12月まで興行収入トップを誇っていた『タイタニック』（97年）は、一人の老婆を中心に、海底調査に取り組むクルーたちによる冒頭のシークエンスが終わると、時代は一気にさかのぼり、若き日のジャックの姿と若き日のローズの姿が華々しく登場していた（『シネマ28』未掲載）。それと同じように本作では、1950年代半ば、妻のレスリー（キャサリン・マコーマック）と共にメキシコ旅行に来ていた、作家にしてロサンゼルスフランス総領事であるロマン・ガリの身体の異変に気づくレスリーの姿から始まる。頭痛を訴えながら、『夜明けの約束』と題した小説の執筆を止めなよとしない夫に妻が内容を尋ねると、「証だ、母についての本だ」と返すのみだったが、さて・・・？

そんな導入部を終えると、時代は一気に1924年にさかのぼり、幼いロマン・ガリを雪煙の中で母親のニナ・カツェフ（シャルロット・ゲンズブール）が迎えに来る姿が描かれる。そして冴えない顔をしているロマンに対してニナは、「先生たちはわかっていない。お前は将来、自動車を手に入れる。フランスの大使になる」と語りかけていたが、これっ

て一体ナニ？先ほど紹介したロマンの経歴と照らし合わせれば、このシーンはポーランドのヴィリニユスの町で、ふたりが過ごしていた時期らしい。モスクワから流れてきたこのユダヤ系母子に対して、周囲の人々は蔑みの目で見ている中、ある日、突然家の中に警察が踏み込んでくる事態が発生！しかし、そんな誹謗中傷の中、ニナの反撃は・・・？

ニナ役を演じたシャルロット・ゲンズブールは、私が『アンチクライスト』（『シネマ 26』83頁）を観た時から「これはすごい！」と目をつけていた女優。彼女はフランスのシンガーソングライターであるセルジュ・ゲンズブールと、イギリスの女優であるジェーン・バーキンの娘だから、英語もフランス語もオーケーだが、本作でニナのセリフにポーランド訛りをつけることを提案したのはシャルロットだったらしい。プレスシートのインタビューによれば、これはシャルロット自身の祖母をニナ役に反映させたためだそうだが、残念ながら私にはそこまでわからない。しかし、アパートの中庭から全体の住人に対して大声でどなり、悪態をつくニナの姿を見れば、息子のロマンはもちろん観客の私も「ああ、やはりシャルロット・ゲンズブールという女優はすごいな」という実感が湧いてくる。しかし、母親からまるで呪文を唱えるかのように、毎日前述のように言い続けられている幼い息子のプレッシャーは、いかばかり・・・？

■□■これがユダヤ流？その稼ぎ方と教育方針に注目（1）■□■

森繁久彌が長い間テヴィエ役を務めたミュージカル、『屋根の上のヴァイオリニスト』ではテヴィエの下に結集するユダヤ人家族の悲しみが顕著だった。また、シェークスピアの小説『ベニスの商人』では、ユダヤ人の金貸しシャイロックの悪徳商人ぶりが目立っていた。他方、「日本人の先祖はユダヤ人だった」という説もあるほど、ユダヤ人の世界的優秀さは今や誰の目にもハッキリしている・・・？？？しかして、本作導入部では、子供時代から高校時代そして大学生に成長していくロマンを育てるニナの、生計の立て方（＝稼ぎ方）と教育ぶりに注目！

帽子の販売で貧しいながらも母子2人の暮らしを維持していたニナだったが、近所の人からの“密告”によって警察に踏み込まれると、たちまち家の中はメチャクチャに。しかし、そんな“嫌がらせ”に負けることなく、逆にアパート中の住人に対して大声でどなり、悪態をつくニナの姿に私はビックリ。それを一番恥ずかしく思ったのは、側に立って住人たちの嘲笑を聞かされたロマンだろうが、そこからロマンの反抗心、向上心、母への熱い想いが生まれてきたのだから、人間は面白い。

中国でも日本でも『孟母三遷』の教えがベストな教育論として定着しているが、子供に対する教育の重要性を認識していたのは、ニナも孟母と同じらしい。しかし、孟母は学校を中心とする子どもの教育環境を重視したのに対し、ニナはあくまで自分流。まずバイオリンを習わせたが、それがからっきしダメだとわかると、ニナは「音楽はダメ」と切って捨てた。次に、ロマンが絵画に興味を示しそれなりの実力を見せ始めたが、そこでもニナ

は「画家はダメ。死後に名前を残しても意味がない」と切って捨てたうえ、次の文学への関心については大賛成し、「お前はトルストイになる。ヴィクトル・ユゴーになる」と目を輝かせて後押しする始末だ。ちなみに、かつて大ヒットした「スポコンもの」の代表が『巨人の星』だが、そこでは一人息子を「巨人の星」に鍛え上げていく父親のスパルタ教育が目立っていた。もちろん、そんな教育は今の時代では「No!」だから、きっと本作に見るニナの教育方針も「No!」だろう。しかし、ロマンが自伝的小説『夜明けの約束』でそんな母親の姿を詳しく描いたのは、それを否定するためではなく、逆に誇りに思っているためであることは明らかだ。

ちなみに、ある日、町の子供たちにいじめられて帰ってきたロマンに対して、ニナは「男が戦う理由は3つだけ。女、名誉、フランス」「今度、母さんが侮辱されたら、担架に乗って帰ってきなさい」「母さんを守ることに命をかけなさい」と一喝していたが、こんな教育の是非は？さらに、社交界に出るためダンスの教育まで施していたからニナの教育方針は徹底していたが、かなり偏っていることは間違いない。私はこれまで多くの映画を観てきたが、こんなケツタイな教育を徹底的にやる母親を見たのは本作がはじめてだ。しかし、そんな教育の下で育ったロマン少年はその後、前述したようなフランスを代表する作家になったのだから、いやはや・・・

■□■これがユダヤ流？その稼ぎ方と教育方針に注目（2）■□■

本作では、ロマンに対するニナの教育方針のユニークさに注目する他、ポーランドのヴィリニユスの町で高級服飾店を開き、それなりにリッチな生活を送るニナの稼ぎ方にも注目！同店が大成功したのは、ニナがパリの有名なデザイナーであるアレックス（ディディエ・ブルドン）を招いて行った宣伝が大成功したためだが、これは詐欺まがいではなく、れっきとした詐欺の確信犯。しかし、たとえそうであっても、堂々とやれば大丈夫・・・？そして、これこそがユダヤ流・・・？もっとも、ツケの常習犯だった客のために、店が破産してしまったのはニナのミスだが・・・。

それでも、ポーランドからフランスのニースに転居したニナは、今度は高級ホテル内の店舗経営に乗り出し、それを軌道に乗せていくから素晴らしい。祖国を失い世界中に散らばったユダヤ人が、自分の国イスラエルを建国できたのは1948年、アメリカの支援を受けてのことだが、本作のニナを見ているとユダヤ人の商才に感服！！

また、男でも女でも思春期になると色気づくのは当然だが、本作では色気づいてきたロマンに対するニナの、その方面での教育も面白い。フランスのニースで商売に成功したニナは若いメイドを雇う身分になっていたが、ロマンがそんな女とまぢがいを犯すと、そこでのニナの言葉は「あんな小娘なんか忘れなさい。大使になれば世界中の美女が寄ってくる」だから、これもユニークだ。

他方、ロシア系ユダヤ人であるニナは、なぜフランスを崇拜したり、そしてそれが日本

人の私にはよくわからないが、本作ではその徹底ぶりに注目し、それが青年に達したロマンにもそのまま引き継がれているので、それにも注目したい。ニースの高校を卒業し、パリの大学に入学したロマンは作家活動を活発化させ、1934年にはグランゴワール紙に短編『嵐』を掲載した。そして、ニナがフランス国籍を取得したのは、1935年の7月だ。そして、ナチスドイツが勢力を増してくる中、ヨーロッパに戦雲が濃くなってきた1938年3月、本作に、ニナが一時帰省したロマンにヒトラー暗殺を遂行する物語が登場するからビックリ！「ヒトラーの暗殺もの」には、私が観たものだけでも『ワルキューレ』（08年）（『シネマ 22』115頁）、『ヒトラー暗殺、13分の誤算』（15年）（『シネマ 36』36頁）、等の名作がたくさんあるが、まさかこんなところにも、母子ふたりだけによるヒトラー暗殺計画があったとは！もっとも、ニナはある事情でそれを断念したからロマンも命を長らえることができたうえ、ロマンは1938年11月4日にはフランス空軍に入隊したから、この母子は大喜び。ところが、ニナの予想に反してナチスドイツの破竹の進撃の前にフランスはもろく、1940年6月、フランスはドイツに屈服。ヴィシー傀儡政権が生まれることに。しかし、そんな中でもロシア系ユダヤ人であるニナはロマンに対してド・ゴール准将指揮下の自由フランス軍への合流を勧めるからすごい。そして、そんな母親の言葉に従ったロマンは、イギリスのロンドンに向かうことに。これにてロマンとニナはイギリスとニースに離れ離れになり、容易に会うこともできなくなったが、やっと一人立ちしたロマンのその後は？ニナのその後は？そして2人の間で交わされた250通の手紙とは？

■アフリカ、リビアは不遇の日々！ロンドンに戻ると？■

百田尚樹の原作を映画化した『永遠の0』（13年）（『シネマ 31』132頁）を巡っては、賛否両論が巻き起こったが、私はこの映画が大好き。同作では、腕はいいのに「死にたくない」「生きて帰りたい」と平気で言っているため“海軍一の臆病者”と呼ばれている主人公・宮部久蔵が興味深く描かれていた。それと同じように（？）、本作では軍の方針に反して、数人の仲間たちと密かにイギリスにあるド・ゴール率いる自由フランス軍に参加しようとするロマンの無謀さが興味深い。

しかし、紙一重の危機を逃れてロンドン行きに成功したものの、そこにはロクに飛行機もなかったから、パイロットとしてのロマンが果たす役割は何もなかったから残念。そんな“待機の日々”が続く中、不満を募らせたロマンが、ポーランド兵と決闘まがいの事件を引き起こす姿はハチャメチャだが、刑務所の中で過ごすロマンを励まし続けたのがニナからの手紙。さらに、刑務所の中で過ごすロマンを「何ヶ月も1行も書いていないね。書かずに、どうやって偉大な作家になるの？」と励ますニナの幻影だ。解放された後もロマンの空軍兵士としての仕事はなかったが、アフリカに赴任したロマンは、母の声に背中を押されるように長篇小説『白い嘘』の執筆を始めることに。さらに、リビアに転任したロ

マンは腸チフスで入院し生死の境をさまよったが、深夜ロマンの前に現れたニナは「世界中で読まれるから、早く『白い嘘』を書き上げなさい」「病気が何？モーパッサンは梅毒でも書き続けた」「勝利するまで闘いなさい。死ぬのは許さない」「ニースに戻ったら、ふたりに海沿いの遊歩道を歩くんだから」と励まし続けた。そして、1943年8月にイギリスに戻ったロマンは、パイロットとしてやっと爆撃機に乗り込み、過酷な出撃を繰り返しながら『白い嘘』を書き続け、完成間近までもってきたからすごい。そして、1944年のある日、出撃から戻ったロマンを記者団が取り囲むことに。書き終えた『白い嘘』のイギリスでの出版が決定したわけだ。

『永遠の0』の後半では、筑波海軍航空隊に勤務し、学徒出陣で予備士官（少尉）となった若者たちの空戦訓練、実質的にはカミカゼ特攻隊の訓練を担当する官部の姿が印象的だったが、本作では連日ロマンが爆撃のため出撃していく姿も印象的。そしてまた、そんな過酷な実戦の連続の中、奇跡のように『白い嘘』を書き続け、完成させる姿が印象的だ。

しかして、『白い嘘』の出版を見届けたロマンは早速その旨をニナに知らせたが、ニナから届いた手紙には「お前は大人。もう私は必要ない」「早く結婚しなさい。お前には女性が必要」「私は元気だから大丈夫」などと型どおりの激励しか書かれておらず、本についての言及が全くなかったから、アレレ・・・こりゃ一体どうなってるの・・・？

■□■この母親はモンスター？それとも？邦題の意味は？■□■

近時日本で発生している父子間や母子間で起きた殺人事件を見ていると、その悲劇性にも驚かされるが、時として母親のモンスターぶりが目立つケースもある。そんな目で本作をみると、とりわけロマンの子供時代におけるニナのモンスターマザーぶりが目立つ。また、大学生になり、さらに軍人として自立してからのロマンをみても、このモンスターマザーから十分自立できていないことがハッキリわかる。近時の日本では、息子の大学の卒業式に母親が出席するだけでなく、入社式に出席するケースもあるそうだが、本作のように何から何まで母親に見張られ、励ましを受け続けているロマンの姿は、ある意味かなり異様だ。毎日命を削って戦っている戦場にあっても、週に1、2度は母親と文通を交わしているロマンのような兵士は珍しいはずだ。

ちなみに、手紙やハガキを題材にした小説や映画は多い。吉永小百合と浜田光夫が共演した『愛と死をみつめて』（64年）は、ミコとマコの往復書簡が元になっていた（『シネマ21』86頁）。また、新藤兼人監督の『一枚のハガキ』（11年）は、出征した兵士が妻に届けてほしいと戦友に託した、たった一枚のハガキがテーマだった（『シネマ27』91頁）。さらに『ヒトラーへの285枚の葉書』（16年）は一人で書いた285通のハガキ（ポストカード）をテーマにした反戦映画だった（『シネマ40』185頁）。しかして、本作の邦題『母との約束、250通の手紙』の意味は？

『永遠の0』では、結局、主人公の官部は最も嫌がっていた（？）特攻隊の一員として

米国艦隊に突っ込んでいったが、本作のロマンは負傷しながらも無事帰還し、1945年には解放十字勲章を受賞したからすごい。「文武両道」を極めるのは難しいが、武の面で解放十字勲章を受賞し、文の面でゴンクール賞を2度も受賞したロマンは国際的に見てその典型だ。しかし、そんなロマンが今、母から受け取った手紙には「離れて何年も経つね。帰宅したとき、お前が私を許してくれますように。全てお前のため。ほかに方法がなかったの」と書かれていたからアレレ……。『白い嘘』の出版を報告した手紙に対する返事も少しおかしかったが、これもかなりおかしい。ひょっとしてニナは再婚でもしたの？そんな心配をしながら久しぶりにフランスのニースに戻ったロマンは、ホテルが既に閉鎖され、別人の手に渡っていることを目の当たりにしてビックリ。ニナはロマンがパリの大学に進学した頃から既に糖尿病に罹患していたから、「俺がロンドンでナチスドイツと戦っている間にそれが悪化し、病院に入院していたのかも？」そう考え、病院に急いだロマンが、そこで主治医から聞いた言葉は……。？そんな、あっと驚く本作の結末は、あなた自身の目でしっかりと。

2019（令和元）年12月24日記